３　資質と専門性を向上させる具体例

（１）幼稚園・保育所・認定こども園における課題

保育者の資質と専門性を向上させるためには、下に示してあるような戸惑いや課題を踏まえて、保育者自身が実践を積み自己研さんに努めるとともに、園や関係機関が園内外での研修を積極的に取り入れ、保育者の実践力と保育者集団としての組織力を向上させていくことが必要です。

＜保育者・園の課題＞

○　幼稚園・保育所・認定こども園間の異動により生じた、教育・保育における重点の違いへの理解

○　「環境を通して行う教育」の取り組み方

○　指導計画の作成の仕方

○　参加できる園内外研修

○　保護者との連携

○　小学校との連携

→Ｐ６　幼保の保育者が感じている幼・保の違いからの戸惑い

（２）保育者の資質と専門性を向上させる六つの具体例Ｑ＆Ａ

ここでは、幼稚園・保育所・認定こども園それぞれが幼児教育の充実につながる具体例について述べていきます。具体例は、課題を参考に保育者の専門性の向上が特に求められている次の６点についてＱ＆Ａとしてまとめました。

六　つ　の　具　体　例

①	幼児理解のための保育カンファレンス	P28・29
②	保護者との関わり	P30・31
③	指導計画作成の手順や考え方	P32・33
④	環境の構成の考え方	P34・35
⑤	保育者集団として高め合う園内外研修	P36・37
⑥	小学校教育につなげる三つの力 （生活する力・かかわる力・学ぶ力）　の指導	P38・39

※具体例の中では、幼児・子ども・園児を「幼児」、幼稚園教諭・保育士・保育教諭を「保育者」と表記する。

①　幼児理解のための保育カンファレンス

Ｑ１　保育カンファレンスとは、どんなことをするのですか。

Ａ

・　保育の悩みを提示して、保育者みんなで幼児の遊びの姿や保育者の関わりと環境の構成などについて意見を出し合い、幼児理解を深め、保育力を高めます。

Ｑ２　保育カンファレンスを行うことで、保育者に何が育つのですか。

Ａ

・　自分が知らなかった幼児の姿を知ったり、自分にはなかった幼児を見る視点に気付いたりして、幼児理解が深まり、幼児を多面的に見ていく力が育ちます。
・　保育者の援助や環境の構成の見直しができます。
・　自分の考えを相手に分かってもらうための具体的な伝え方が身に付きます。

Ｑ３　保育カンファレンスで大切にするところは、どのようなことですか。

Ａ

・　立場や経験年数に関係なく、一人の保育者としてみんなが対等に自分の思ったことを率直に語り合うことです。
・　話しやすい雰囲気づくりに努め、他の保育者と意見が異なる場合は否定をせず、自分が共感できるところを伝えることです。

Ｑ４　保育カンファレンスの具体例を教えてください。

Ａ　【具体例】　保育カンファレンス

＜事例（４歳児　１１月）＞

担任保育者　動物園の遠足の翌日、見てきた動物の絵を画用紙にかかせたいと思います。しかし、絵をかくことに抵抗があってかきたがらない子や、かくことはいいけれど、動物がうまくかけずに手が進まない子もいると思います。どうするとよいのでしょう？

Ａ保育者：　私だったら、事前に子どもたちが出会う動物に親しみがもてるように動物図鑑を見せたり、動物の載っている絵本を読んだりします。前もって「ぞうさんの鼻はどのくらい長いのかな？」「きりんさんの模様はどんな形だろうね？」と声を掛けて、子どもたちが楽しみにして出掛けると、関心をもってよく見てきますよ。

B 保育者：　なるほど、初めて動物園に行くという子もいるし、先生の話からイメージを膨らませる子もきっといますね。それに、動物園に出掛けても、動物をかきたい子ばかりじゃないと思います。バスに乗ったことがうれしくて、バスがかきたくなる子もいると思いますよ。

C 保育者：　動物をかかせたいというのは大人の感覚かもしれません。子どもにとって遠足そのものがわくわくすることで、好きな友達とシートをくっつけてお弁当を食べたことがうれしくて印象に残ったという子もいると思います。

担任保育者：　そうですね。動物園に行ったら、動物の絵をかかなくては、という思いが自分の中にあって、特徴を捉えてかかせたいという思いが先行していたのかもしれません。

D 保育者：　動物園に行くことで、子どもたちにどんな経験をさせたいかということが大切だと思います。絵をかくことが苦手でも、手を伸ばして揺らしながら鼻の長いぞうの動きをまねたり、つま先立ちで首の長いきりんを表現したりする子もいますよ。遠足後にもいろいろな活動が展開できます。

E 保育者：　そうそう、子どもってその子らしい様々な表現を見せてくれますね。私、C先生の表現で面白いなって感心したことがありました。昨年のこの時期に、C先生は園庭に落ちた柿の葉を何枚かテープでつなげて鼻につけてぞうの鼻のようにゆらゆらと揺らしていました。そうしたら、子どもたちがまねをして長さ比べをしたり、ある子はお面ベルトに葉をつけて、うさぎになってぴょんぴょん跳びはねたりしてとっても楽しそうでしたよ。

担任保育者：　先生たちの話を聞いていて、自分自身もいろいろやってみたくなりました。絵をかくことだけではなく、子どもたちが感じ取ったことを一緒になって表現して楽しんでみたいと思います。

＜保育カンファレンスを通して学んだこと＞

担任保育者は、他の保育者の今までの経験や幼児の捉え方を聞き、動物園へ遠足に行くという経験から、絵をかかせたいということだけにこだわっていた自分自身を振り返るとともに幼児一人一人の感じ方や体験する中身が異なることに気付きました。

そして、次の２点が大切であると学ぶことができました。

- 幼児自身がどのようなことに心を動かすのかを予想し、幼児がいろいろな感じ方ができるように働き掛けをすることが、その幼児なりの表現につながること。
- 保育者も幼児と一緒に、感じたことや印象に残ったことを、絵や言葉、また動きなどの様々な方法で表し、十分に楽しむこと。

②　保護者との関わり

Ｑ１　保護者と関わるときに、どのようなことに配慮するとよいですか。

Ａ

- 保護者の話はしっかり聞きます。「傾聴する態度」「話しやすい雰囲気づくり」が大切です。
- 幼児の姿や育ちについて、具体的な場面を捉えて丁寧に伝えていきます。トラブルの報告ばかりにならないようにします。
- 保護者からの要望には、安易に一人の判断で回答せず、平静な態度で聞き置き、上司へ報告・相談をした上で、対応します。
- 病気やけがには、速やかな連絡・報告に心掛けます。医療機関に掛かるときは、保護者の意向を十分に把握しておきます。
- 保護者から得た情報は他の保護者の前で話さないように気を付けます。

Ｑ２　幼児同士のトラブルは、保護者にどのように伝えるとよいですか。

Ａ

- 幼児の思いと周りの幼児を含めた状況、経緯、園での対応などを説明し、保護者が冷静に話を受け止めてもらえるような伝え方をします。
- けががあれば、どのように対処したかを伝え、家庭や医療機関で引き続き処置や観察が必要である場合は、手続や必要書類についても伝えます。
- お互いの保護者に話をする場合は、相手の名前を伝えるのか、主任や園長も交えて話すのかなど、保護者間の様子やけがの状況による対応が必要となります。
- 初期対応を誤ると、大きな問題につながるので、園全体で誠意をもった対応策についてしっかりと共通理解しておくことが大切です。

Ｑ３　預かり保育や長時間保育の幼児の保護者にどのように幼児の様子を伝えるとよいですか。

Ａ

- 担任と当番（担当）保育者が情報を共有し、保護者に、幼児の一日の様子をきちんと伝えて、安心してもらうことが大切です。
- けがやトラブル、体調などを含めたその日の幼児の様子を保護者にきちんと知らせるために、引継ぎノートを作り、必ず保護者に伝わるようなシステムを作ります。伝える内容によって「直接話す」「連絡帳に記入する」「電話で連絡する」などの方法を活用します。
- 電話などを利用して、様子を伝える場合もありますが、その際は、伝え方を十分に検討し、できれば上司のいるところで話すことで、伝え違いや聞き取り違いのないように配慮します。

Q4　保護者と話をする具体例を教えてください。

A　【具体例】　保護者からの相談や話し掛けがあった場合

＜しっかりと話を聞きます。＞

保護者の話をしっかりと聞き、「お話（教えて）いただいて、ありがとうございました。お母さんのお話は分かりました」と保護者の気持ちを受け止め、理解しましょう。把握ができてなかったことに対しては、「気が付かなくて申し訳ありませんでした」と、素直に答えましょう。いつも話しやすい雰囲気をつくりながら、「先生に話してみようかな」「相談してみようかな」と、保護者が思えるようにしていきましょう。

＜幼児の育ちや日常のささいな出来事も伝えます。＞

Ａ児の保護者に「Ｂちゃんとおもちゃの取り合いになったのですが、先に使っていいよと、Ａちゃんが譲っていました。本当は、Ａちゃんも先に使いたかったのですが、順番に使うことにしたようです。その後、二人は仲良く遊んでいましたよ」と、幼児の育ちを保護者と共に喜び合えるような伝え方をしましょう。

A　【具体例】　おもちゃを取り合って、幼児がけがをした場合

幼児の状況

Ａ児が赤いミニカーで遊んでいました。近くで遊んでいたＢ児も赤いミニカーが欲しくなり、「貸して」と言いましたが、「だめ」と断られ、ミニカーを取り合ううちに、怒ったＢ児が他のミニカーを投げ、Ａ児の腕に当たり赤く腫れました。

保育者は、少し離れたところにいて、取り合いが始まったことには気付きませんでした。言い争う声を聞き、すぐに駆け寄りましたが目の前でＢ児がミニカーを投げてしまいました。保育者はけがを治療し、Ａ児とＢ児の思いを聞き、周りにいた幼児から状況を聞きました。

＜幼児が怒って物を投げることを止められなかったことやけがをさせたことを謝ります。＞

「私が、言い争いに気付くのが遅れ、けんかが起きてしまいました」「Ａちゃんがけがをして、痛い思いをさせてしまいました。申し訳ありませんでした」「Ｂちゃんの気持ちに、早く気付いてあげられず、相手にけがをさせることになってしまい、申し訳ありませんでした」「これから気を付けていきます」と誠意をもって伝えます。

＜保護者と関わる時に大切したいこと＞

保育者は日頃から、幼児のよいところや小さなことでも成長してきたところを伝えて保護者との信頼関係づくりを心掛けていくことが大切です。そして、今後このようなことが起きないように留意し、しっかり対応することを保護者に伝えるとともに、他の保育者へも情報提供の協力を依頼していきましょう。

③　指導計画作成の手順や考え方

Ｑ１　指導計画を作成する手順や考え方を教えてください。

Ａ

＜指導計画の手順＞	＜指導計画の考え方＞
教育課程（幼稚園） **保育課程**（保育所） **全体的な計画**（幼保連携型認定こども園）	入園から修了までの幼児の発達過程を見通し、長期的な視野をもって編成します。
長期の指導計画	年・学期・期・月等を単位とした期間を見通して作成します。
短期の指導計画	週・日等を単位とした期間を見通して作成します。
幼児の実態	先週や前日の幼児の姿を記録や反省・評価を基に思い浮かべ、保育者や友達との関わり、遊びの様子、生活の状況などを把握します。
ねらい **内　容**	ねらいは、幼児に育ってほしい心情・意欲・態度です。内容は、経験してほしいことです。
予想される活動	幼児の発達や時期・遊びの様子・行事の関連性・活動の連続性等から活動の展開を予想します。
環境の構成	具体的に考えたねらいや内容や活動を基に、物や場所、数や量、配置などを幼児の姿を思い浮かべながら考えて準備していきます。
予想される幼児の姿	環境へどのように関わっていくか、どのように遊びを展開していくか予想します。
保育者の援助	ねらいや内容が達成されるように、一人一人の環境に関わる姿を思い浮かべながら、具体的な援助を考えていきます。

園における指導は、**幼児理解に基づく指導計画の作成、環境の構成と活動の展開、幼児の活動に沿った必要な援助、反省や評価に基づいた新たな指導計画の作成といった循環**(※)の中で行われるものです。指導計画は、このような循環の中に位置し、常に実践を通して**記録を基に**反省や評価を行い、改善を図る必要があります。

※　→Ｐ２３　保育を構想し、実践するための取組

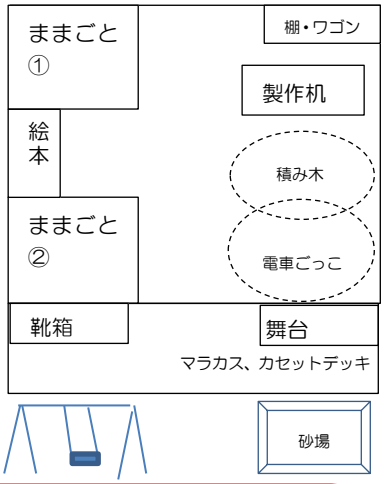
Ｑ２　短期の指導計画の具体例を教えてください。

Ａ　【具体例】　週案（３歳児　１０月　第３週）　※一部を抜粋

幼児の実態	戸外で体をよく動かすようになり、追い駆けっこをしたり、遊具に登ったり降りたりして、保育者や周りにいる友達と楽しむようになってきている。室内では、段ボール箱を車に見立てて遊んだり、気に入った友達と一緒に曲に合わせて歌ったり踊ったりしている。		
ねらい	○　保育者や周りの友達と一緒に、体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。 ○　自分の思いを出し、したい遊びを楽しむ。	内容	・　保育者や周りの友達と一緒に、役になったり、踊ったり、遊具で遊んだりする。 ・　保育者の表情や言葉から、順番や遊具の使い方などを自分なりに考えようとする。

◎予想される活動　☆環境の構成　◇予想される幼児の姿　△保育者の援助

◎　電車ごっこをする。
☆　友達と同じような電車を作って遊べるように、一人で入るとちょうどよい段ボール箱や空き容器などを用意し、作って遊べる場も準備しておく。
◇　段ボール箱の電車に一人で入り運転士になったつもりで遊んだり、保育者や友達の電車とつながってお客さんを乗せて走ったりして遊ぶ。帽子や切符などを作ったりする。
△　なりきっている気持ちや言葉を受け止め「○駅に行ってください」など幼児のイメージに合った言葉を掛けていく。



◎　曲をかけて踊る。
☆　興味のある曲をすぐに踊れるように、運動会や生活の中で取り入れている曲を準備する。また、音やリズムも楽しめるように、扱いやすい手作りマラカスなどを用意しておく。
◇　好きな曲に合わせて踊ったり、手作りの楽器を鳴らして音を楽しみながら踊ったりする。
△　周りの幼児と一緒に楽しめるように、保育者も楽しそうに踊り、「楽しかったね」と幼児の気持ちに共感する。

◎　鉄棒、ぶらんこなどの遊具で遊ぶ。
☆　一人一人の発達に合った取組ができるように、高さの調節をしたり、マットを敷いたり、他学年と園庭や遊具の調整をしたりする。
◇　「見てて」「一緒にやろう」と、保育者や友達に声を掛けたり、誘ったりしながら、見ていてくれる安心感をもちながら遊ぶ。
△　いろいろなことをやってみようとするが、太鼓橋や雲ていなども手でしっかり握ることや、順番を守って遊ぶことなどを、保育者も一緒に遊びながら知らせていく。

今週の記録より

Ａ児は運転士を気に入っている。今日は「先生、乗って」と何度も保育者をお客として誘っていた。「○駅に着きました」「○○線は乗換えです」と自分から話すことも楽しんでいた。Ｂ児は積み木の電車作りをしているが、視線は段ボール箱の電車で遊ぶＣ児を追っていた。Ｃ児はＤ児とつながって走ったり、紙に模様をかいた切符を作ったりして、二人で遊ぶことを楽しんでいた。

保育者は、「Ｂちゃんも電車に乗る？」と声を掛けたが「やらない」と言う。Ｃ児と同じことをしたいと思ったが、まだ早かったかもしれない。電車の数を増やし、Ｂ児が「やりたい」と言ったときにすぐに準備できるようにしていく。

Ｂ児はまず様子を見ているのかな。段ボール箱の電車の数を増やすのはよいですね。Ｂ児が数日間興味を示しているようならば、まずはお客さんとして誘ってみるのもよいかもしれませんね。

Ｑ３　日々の保育記録はどのような視点で書くとよいですか。また、それをどのように生かしていくとよいですか。

Ａ

・　**幼児の姿**と**保育者の援助**と両方の視点を捉えて書きます。＊Ｑ２具体例

担任の記録

園長のコメント

① 幼児の姿

心に残った幼児の行動や言葉や表情、変化、遊びへの取組など。

② 保育者の援助

幼児と関わって分かったこと、幼児への関わりや環境の構成は適切であったか、課題は何かなどの振り返り。

・　記録から幼児の育ちを読み取り、反省・評価を積み重ねることや保育者同士が考えを伝え合うことで幼児理解の深まり及び指導力の向上などにつなげていきます。

④　環境の構成の考え方

Ｑ１　環境の構成をするとは、どのようにすることですか。

Ａ

・　幼児の姿に即して、その時期にどのような体験を積み重ねることが必要かを明らかにした上で、活動に適した場や空間、遊具や素材、保育者や友達、時間、雰囲気、自然環境、社会環境も含めて、幼児が充実した園生活を展開できるような状況をつくっていくことです。

Ｑ２　環境の構成を考える際に、大切にすることは何ですか。

Ａ

・　幼児の主体性

幼児の中に興味や意欲が湧いてきて、自分から遊び出し、活動を展開することができるように、魅力ある場や空間や状況をつくり出すことです。

・　保育者の意図（計画性）

幼児が主体的に環境と関わり、豊かな体験を重ねていけるように、幼児の発達を踏まえ、幼児の興味や関心の対象、これまでの経験などを考慮して計画的につくり出すことです。

Ｑ３　環境の構成をするとき、具体的にどのような視点をもつとよいですか。

Ａ

・　幼児の思いに合わせた場・空間・雰囲気

幼児が何を楽しんでいるのか、どんな活動をしたいのか、その人数や規模はどの程度か、幼児の動線はどうかなどを考えながら構成します。

・　様々な遊具・素材・数量・配置

したいことや作りたいものがあっても、それに合った遊具や材料がなければ実現できません。数や量や形は適当か、どの場所に置くのか、今の幼児に扱えるものか、また保育者がどこまで準備しておくべきかなどを考えて構成します。

・　やりたいことが十分にできる時間の保障

幼児が活動に取り組むためには、多くの時間が必要になります。幼児が心と体を働かせて、選んだ遊びに納得できるまで十分に関わることができる時間を保障します。

・　幼児の生活に沿った自然環境や社会環境、保育者の存在

その場にいる友達や保育者、そのときの自然事象や社会事象も幼児の活動や体験の質に影響を与えていることを考慮して、環境の構成を行います。

・　環境の再構成

幼児の活動の状況に応じて、幼児と共に場を広げたり遊具を整えたりして臨機応変に環境をつくり変えていきます。

Ｑ４　環境の構成の具体例を教えてください。

Ａ　【具体例】　幼児の思いに合わせた環境の構成　（４歳児　６月　日案）

〔本日のねらい〕
友達と触れ合って遊ぶ楽しさを味わう。

〔内容〕
一緒にいたい友達と気に入った場でおしゃべりをしたり、同じような動きをしたりする。

昨日の幼児の姿

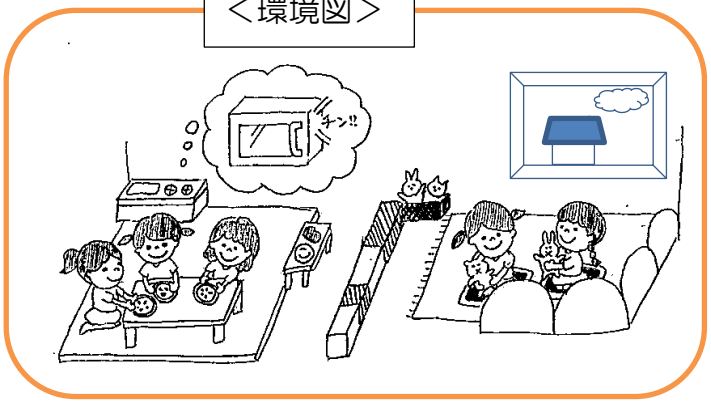
・　気になる友達、好きな友達ができ始め、同じ場で過ごすことに心地よさを感じ始めている。Ａ児、Ｂ児は、お母さん役になりきって赤ちゃんをあやしたり、ごちそうを作ったりすることを楽しんでいる。また、Ｃ児、Ｄ児、Ｅ児は粘土をピザやクッキーに見立てて遊んでいる。

・　好きな友達と同じ場でおしゃべりをしたり、同じ物を作ることを楽しんだりしているが、お互いにしたいことがあるときなどに、思いがうまく伝わらず、ぶつかり合う場面が見られる。

＜環境の構成＞

◆　Ａ児、Ｂ児、そして、Ｃ児、Ｄ児、Ｅ児がそれぞれの遊びが落ち着いてできるように、つい立を用意する。また、つい立は隣の遊びの様子が見えるような高さにし、お互いの雰囲気が伝わるようにする。

＜環境図＞



◆　Ａ児とＢ児の二人の居心地のよい家となるように、部屋の隅を利用し、かわいい座布団を用意したり、二人で同じようにお世話ができるようにぬいぐるみの数をそろえたり、壁に飾りを付けたりなどする。

◆　Ｃ児、Ｄ児、Ｅ児がピザやクッキーを焼いたり食べたりしながらお母さんやお姉さんらしくふるまって楽しめるように、段ボール箱で作ったレンジをコーナーに置いたり、紙皿やトッピングできる材料や鍋つかみなどを準備したりしておく。

＜環境の構成としての保育者の援助＞

・　一緒に遊んでいる友達を意識できるように「○○ちゃんは星の形のクッキーで、△△ちゃんはハートの形のクッキーを作ってるのね」と、言葉を掛け、友達と同じように遊んでいる楽しさに共感します。

・　隣にいる友達を意識し互いに思いを出し合えるように、必要に応じて、「お隣の○○ちゃんたちのクッキーは焼けたかな、いいにおいがするね」と、お互いの橋渡しとなる言葉を掛けたり、保育者がそばで見守ったりしていきます。

⑤　保育者集団として高め合う園内外研修

Q1　研修を園の組織力や保育力の高め合いにつなげるには、どのような工夫ができますか。

A

園内研修の工夫

誰もが意見を出しやすい雰囲気を作り、意見を受け入れ合います。

公平に進行する役を園長や主任が担います。

自園の特徴を理解し、よさや課題を把握して、研修のテーマや手だてを考えます。

付箋紙に意見を書き出し、“意見の見える化”をしたり、写真等で“テーマや話題の見える化”をしたりします。

テーマを絞って学びます。研修の手法やマネジメントの理論を取り入れ、意見の集約が有効にできるようにします。

他県・市町の研修方法、小児センターや保健センターの研修方法など、多様な方面の研修方法も参考にします。

外部講師を招き、経験年数や立場に合わせた参加者が継続して研修を行い、効率のよい研修を行います。

※→Ｐ１０・１１　園内研修例

A

園外研修の工夫

参加者が受け身的にならず、目的意識をもって参加できるよう、園長や主任が働き掛け、学びの効果が高まるようにします。

担当する学年の公開保育に参加し、実践に結び付けたり、異校種研修(※)に参加し関係機関について学ぶ機会をもったりします。

研修後、報告書や記録を回覧したり、他の職員に伝達したりして、研修内容を共有します。

※ 異校種研修とは、幼稚園・保育所・認定こども園・小学校の異なる種の施設へ行く研修

Q2　それぞれの得意分野やよさをどのような形で保育に取り入れると、保育者集団として高め合うことができますか。

A

- 園長は、保育・行事・会議等の進行役やリーダーとして、保育者の得意分野が生かせる役割分担や配置をします。
- それぞれの保育者が、得意分野を生かして実践することは、身近なモデルとなり、中堅保育者が少ない職場での保育の学び合いにつながります。

Ｑ３　保育力を高めるための園外研修の具体例を教えてください。

Ａ　【具体例】　園外研修

年齢別公開保育例　「〇歳児研修会」

＜特徴・内容＞

- 幼児の年齢を限定して公開保育を行います。
- 他園や異校種から同年齢担当の保育者が参加します。
- 指導案を踏まえて、保育を参観します。
- 参観後、課題をもちグループに分かれて幼児の姿と保育者の関わりについて話し合います。
- グループの意見を発表し合います。

長所

- 担任している幼児の発達や活動についての共通点が多く、意見や課題が言いやすく、受け入れやすい。そのため、より積極的な話合いがもてます。
- 得た情報や学びをすぐに自分の学級の指導計画に生かしていけます。

テーマ別研修例　「遊びの環境の構成を学び合う」

＜特徴・内容＞

- 市内の参加できる保育者が集まります。
- 年齢別のグループに分かれて、各年齢の指定した時期にふさわしい遊びの環境について考えを出し合います。
- 年齢や遊びに適した教材を、参加者で作りながら、保育室の環境を構成します。
- それぞれのグループで構成した環境を見合って、質問したり、実際に遊んでみたりします。

長所

- 実技研修では、参加者の得意分野を生かしやすく、経験年数の幅を越えて教材研究の参考となる情報が多く得れます。
- 大勢で実際に環境を構成したことで、遊びを展開していくイメージや年齢による環境の構成の在り方が体験として身に付きます。
- 研修で得たことを、自分の園の保育にすぐに取り入れることができます。

保育実践力を向上させる市町村研修例　「〇〇市保育研究会」

＜特徴・内容＞

- 同じ市内の保育者が、月に１回集まります。
- 経験年数の近いグループ等に分かれてテーマを決めて話し合います。
- テーマに沿った資料を持ち寄り、各自の保育実践をもとに作成した資料や内容について話し、学び合います。

＜テーマ例＞
〇豊かな実践につながる１０月の指導計画作成
〇障害のある幼児と共に行う運動会の在り方

- 年度末にグループの報告会を行い、一年間の研修のまとめを行います。

長所

- 月ごとに集まる研修のため、参加者の都合に合わせて参加回数が調整できます。
- 地域状況や各園の動向について情報交換ができます。
- 継続してテーマに取り組むことで、参加者の学びが深まります。
- 自分の園では解決できなかったことについて、参加者から意見をもらい、指導の改善に生かせます。

⑥　小学校教育につなげる三つの力（生活する力・かかわる力・学ぶ力）の指導

Q1　小学校教育につなげる三つの力（生活する力・かかわる力・学ぶ力）とは、園生活において、具体的にどのような力と捉えたらよいですか。

A

・　幼児期（特に幼児期の終わり）における学びの基礎となる力です。この三つの力は、小学校低学年の生活科の目標に通じていきます。

生活する力

○　健康で安全な生活をする。
○　生活に必要な活動を自分で行う。
○　周りの状況を見て、見通しをもって行動する。

かかわる力

○　自分から周りの人に親しみをもち、関わろうとする。
○　きまりの大切さが分かり、進んで守ろうとする。
○　互いのよさを認め合い友達と協力して活動する。

学ぶ力

○　自分の興味・関心をもったことに進んで取り組む。
○　自分の考えを言葉で伝えたり、工夫して表現したりする。
○　文字や数量などの感覚を豊かにする。

※　平成２４・２５年度愛知県幼児教育研究協議会報告「アプローチカリキュラム編成の手引」

Q2　小学校との円滑な接続のために、指導計画や園での活動をどのような視点で考えていくとよいですか。

A

・　幼児期と小学校の教育の違いや共通の教育内容を理解し、『アプローチ期』（５歳児後期１０月～３月）と『スタート期』（１年生４～５月）のつながりを押さえながら、指導計画を作成します。『アプローチ期』に、幼児一人一人が「三つの力」における目指す姿に育っているかを確かめ、課題を見いだしたり、手だてを考えたりして指導計画に取り入れていきます。
・　幼児ができるようになることを目指すのでなく、興味や関心をもって集中して取り組めるようにすることを大切にします。幼児期後半には、気の合った仲間同士の活動だけでなく、集団の一員としての自覚を育てる活動を重視することも必要です。

◇幼稚園・保育所・認定こども園と小学校の相違点と共通点

相違点	園では、計画的に環境を構成し、遊びを中心とした生活を通して体験を重ね、一人一人に応じた総合的な指導を行いますが、小学校は、時間割に基づき、各教科の内容を教科書などを用いて学習しています。	共通点	小学校教育における園の教育との共通点は、教師が教えるだけでなく自分で調べるなどの主体的な学習を重視していることです。さらに、総合的な学習の時間では、体験活動を通し自分たちで課題を見付け探究していくことを大切にしています。また、生活科においては、他教科などとの関連を積極的に図り、生活科を中心とした合科的な指導も行われています。

◇幼稚園・保育所・認定こども園と小学校が連携していくこと

○　幼児と児童の交流活動（年間計画の作成、事前打合せ・事後情報交換）
○　保育者と教員の意見交換、合同研究会、授業・保育参観、事例の話合い
○　接続を見通した教育課程の編成・実施

Ｑ３　アプローチ期に大切にしたい具体例を教えてください。

Ａ　【具体例】　興味、関心を深めていく　（５歳児　９月）

＜事例「虫の研究所をつくろう」＞

幼児たちは虫を捕まえ、飼育ケースで飼っていましたが、死んでしまう虫が出てきました。「どうしたら、死なないようになるのかな」「（飼育ケースに）土を入れると本物の住んでいるところみたいになっていいんじゃない」「（図鑑にあるように）暗いところもつくるといいよ」と意見が出ました。

「そうだ、虫の研究所をつくろう」

友達と何日もかけて、段ボール板で囲いを作り、虫について調べるために必要なものをそろえ、看板をつけ『虫の研究所』をつくりました。「この虫はどうやって飼うといいんだろう」「どんな名前なのかな」と疑問をもつと、「そうだ、研究所に行って調べよう」と研究所に行きました。そして、どのような住みかがよいのか図鑑で調べるなど、幼児たちの中で「研究」が定着していきました。また、折り紙でかまきりを折ったり、虫の名前と絵をかいてケースに貼ったりするなど、主体的に関わる姿が見られました。

「こおろぎってオレンジを食べるんだって」

次の日、幼児が家からオレンジを１個持ってきました。実際にこおろぎがオレンジを食べる姿を見て幼児たちはとても感動し、調べたことに納得している様子でした。

保育者は、幼児が自ら関心をもったことに対して、友達と一緒にじっくり調べたり、確かめたり、興味を広げ、深めたりするための十分な時間や場所、道具などを用意していきましょう。幼児期には、興味・関心をもったことに試行錯誤しながら取り組む体験を十分にしておくことが大切です。そのことが学びに向かう力を育み、小学校以降の学習の取組への意欲につながっていきます。

Ａ　【具体例】　互いに認め合う集団を育てる　（５歳児　２月）

＜生活発表会への取組＞　※文部科学省特別選定 幼児教育映像制作委員会企画ビデオ「やっぱりそうだよね」より

３学期の生活発表会でやりたいことを、クラス全体で話し合います。

＜劇遊び・ペープサート・影絵・歌・楽器演奏など＞

① 自分が取り組みたい劇・ペープサート・影絵など、グループに分かれて、それぞれで進めます。

② 意欲的に取り組んできたこと、夢中になって楽しんできたこと、こつこつ頑張ってできるようになったことなどを織り交ぜてお話を組み立てていきます。今まで親しんできた絵本や物語を取り入れながら、自分たちでストーリーや演じ方を考えます。

③ 一緒に演じる友達と生活発表会までの見通しをもち、大道具・小道具・お面・衣装等、相談しながら必要な物を作ったり、練習する時間を決めたりして取り組んでいきます。

④ 学級全体で歌を歌ったり、自分のやりたい楽器を選び、楽器演奏をしたりします。

みんなで気持ちを合わせる心地よさが感じられるように、取組を進めます。

保育者は、台本通りにせりふや動きを教え込むのではなく、幼児がこれまでの遊びや生活の中で経験してきたことを生かし、友達と一緒に考えを出し合ったり、相談したりして取組を進めることができるようにしましょう。その中で、幼児一人一人が持ち味を発揮し、互いに認め合い、協力してやり遂げていく心地よさを感じることが大切です。そのことが、小学校以降、仲間と共に目的に向かって取り組む姿につながっていきます。